桜色

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
桜色

【Ｎコード】
Ｎ２５４６Ｆ

【作者名】
イラル

【あらすじ】
綺麗な桜色の中に佇む貴方。「君のせいだよ。」のその言葉。全てわかったのは、時既に遅し。アナタノセイヨ。

暗い暗い洞窟を抜けて。
その先にあるのは、行き止まりと、パラパラ降るピンクの雨。
いえ、桃色の雪かしら。
……それとも違う桜色。
それは地面に落ちては風で舞い上がる。
渦を巻き、人をも飲み込むでしょう淡い色。
それは普段、雨や雪のように上から降ってくるわ。
けれど、強い風に下からも降ってくる。いえ、舞い上がってくるの。
その中で、貴方は立っていた。
ずっとずっと。
その舞い散る花びら達を眺める貴方。
私になんか気付かない。

「貴方は何故そんなにも必死に、ずっと。その桜の花びらを見つめているのですか？」

私はやっと声を振り絞って彼に話しかけた。
胸がドキドキして止まらない。
彼の滑らかな黒い髪が、風で揺れる度に目でそれを追ってしまうの。

「……綺麗だから。」

想像とは少し違う、透き通るような声で貴方は言う。
貴方の姿は幾度となく見に来たけれど、声を聞いたのは初めてで。
高鳴る胸は早い鼓動を止められないでいる。
言ってしまいたい。貴方も負けないくらい綺麗なのだと。
でも、それは恥ずかし過ぎて。

口に来る前に飲み込んでしまうの。

「そう……この花びらは何処から来るのかしら？」

私は、舞う花びらに視線を移す。貴方の横顔が何故か見れなくて。
私は今、恥ずかしいのかもしれない。
女の私よりも白くて綺麗な肌、見透かすような黒い瞳。
それでいて、物腰が柔らかそうな優しい微笑みを持つ彼に。
私は敵わないと認めてざるをえないから。

「わからない……。何処からか来るんだ。桜の木なんてここら辺にないのにね。」

彼は言った。
私は気付いた。彼の言葉で。
桜の木は、どこにもないのだと。
ドクンと、心臓が波打った。
手に汗が浮かび、頭の中はぐるぐると回転して。
四方八方に眼をやっても、桜色はあれど、木々は見えず。
取り囲むような小さな崖と、その上の緑以外。すべて桜色。
空から降ってくるそれ。

「だってここは桜が育たない土地だから。」

私は言った。
知っていることを口にして、更に背筋が冷たくなる。
桜の木だけじゃないわ。背の高い木は皆、育ちはしないの。
ここで育つのは木でなくて草。たんぽぽや、紫陽花。
桜の木はないの。絶対にありはしないの。

「……君のせいさ。」

彼が私に顔を向けた。
とても優しい柔和な笑みを。
ドキっとした。その笑顔と言葉に。
私のせいとはどういうことなのかしら？
彼の顔はとても優しくて綺麗な笑みを浮かべているけれど、
彼の内面を写し出してはくれなくて。
私は小さく首を傾げた。

「……君の。せいだよ。」

彼は私に顔を向けた。
責めるような。
憎むような。
ゾッとするような。

冷たい瞳。

その視線がぐっさりと私に突き刺さったの。
目を細められてさらに寒気が私を襲う。
恐くて。
こわくて。
コワクテ……。

けれどそこから目が離せなくて。
すると、彼と私の間を淡い桃色が遮った。

「っ……！！？」

次の瞬間、私は息を飲んだわ。
彼の右目から透明の滴が流れ落ちて、
それからっ、それから暗い深い先が見えない彼の影が、

カレヲオソッタノ。

何とも言えない感覚。
黒い影が彼の後ろに立ち、多い被さる様に彼を一瞬にして飲み込んでしまったの。

今はもう誰もいない。

彼は最後まで私を睨み続けていたわ。
けれどその顔は、悲しみが見てとれたと、そう思う。
誰もいないその場所に白い雪が舞い落ちた。
こんな春先に雪と桜の花びらだなんて。
白と桃色のコントラスト。
私しかいないその場所にゆっくりと舞い落ちて…。
私のココロはぽっかりと穴を空けたまま。
その穴に響き渡るのは……貴方の言葉。

キミノセイダヨ。

頭の中でリピートする度に、
鳥肌が立ち、
嫌悪感が込みあげ、
いないはずの貴方の映像が思い浮かぶ。
私の目からは透明の。
下からは桜色、上からは白色の。
色が交わり散っていく。

そのなかに潜むのは、攻めたてられた自己嫌悪と、わからないままの不安感。

キミノセイダヨ。それはいったいどういう意味？
答えてくれる人は、もうイナイ。

素早く過ぎて行く時間は段々と私の心を癒してくれた。
あれから一年。過ぎ去ってしまったのね。
暗い暗い洞窟を抜けたそこは、緑の葉がパラリぱらり。
一年前の淡いピンクと白のコントラストなんてみる陰もないわ。
私の心を洗い流したくて、たくさん出た透明の涙も、嘘のよう。
あれから何も変わらない生活が過ぎて行った。
ここには誰も来ないし、緑色ばかりで、普通の空間。
アレが嘘のよう。
幻のようなあの時。けれど私はなんとなく心に引っ掛かりがあって。
もう一度、桜色が見たくて。
毎日かかさずやってくるの。
だけど、この景色は変わらずに緑色。
その景色に何故かホッともするわ。
今日も少し、この緑の中で一休み。
耳を澄ますと、足音がした。

「っ……！？」

鳥肌が立ち、冷や汗がにじみ出た。目は見開いてソレを凝視する。

桜色。

緑だったソレが桜色に変化したの。

私は理解したわ。舞い落ちるソレは葉でも花びらでも雪でもありはしない。
一年前のアレと同じソレなのだと。

キミノセイダヨ。

その言葉が脳裏に浮かび上がって。
増えて、ふえて、私の頭を支配するの。
視線が痛い。
足が動かない。
チラリと見えるのは、見知らぬ顔のアナタ。

「君は何でそんなにずっと、その桜の花びらを見つめているんだい？」

聞き慣れない低い声。それは、一年前の私のようで。
胸がびくっとした。

「綺麗だから……。」
とっさにそう答えて。
「そっか……この花びらって何処から来るんだろうね？」

「わからないわ……。何処からか来るのね。桜の木なんてここら辺にないのに。」

心が冷えきって行く。
背筋に走る冷たい恐怖。

「だってここは桜が育たない土地だから。」
アナタのおかげで、貴方が言ってたこと。ようやくわかったわ。

アナタは一年前の私。
花びらに見えるソレは人の心を映す鏡。
普段と変わらない心は緑色。
白色は透明な涙で。
桜色。それは、淡い恋心なのね。
私の影がゆっくりと動き出すのに気付いたわ。
次の獲物を見つけた喜びにうち震えるように。
これは罠。
桜色の餌に引っ掛かった私とアナタ。
このままでいたら、きっと私は……。

キミノセイダヨ。

えぇ、そうね。

「アナタのせいよ。」

残るのは、自己嫌悪と諦めと……アナタに対する怒り。
桜色が無情にも私の視界を遮った。

「アナタノセイヨ。」

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2546f/

桜色

2010年10月28日08時42分発行